

鄭州商代銅器窖藏考

—— 中国古代の銅器窖藏 1 ——

近 藤 喬 一

青銅器を埋める
鄭州商代銅器窖藏
方鼎をめぐる
いつ、なぜ、誰が
鄭州商城の歴史
廟號新考の援用

青銅器を埋める

2004年2月28日、上海博物館で潘達于百歳寿星が祝われた。清の光緒帝の時代に軍機大臣の要職にあった潘祖蔭の孫と結婚した彼女は、1923年18歳で嫁入りしたが3ヵ月後には夫を亡くし、祖父も翌年死去したあと潘家の大黒柱として激動の時代を生き抜いた。潘家の伝世の宝として清光緒年中、陝西扶風法門寺任村で出土した大克鼎と清道光初年、陝西眉県で出土した大孟鼎を所蔵していたが、抗日戦争中も蘇州の邸宅の石磚の下に穴を掘って埋め隠し、後には物置き小屋の中に放りこんでおいて守り、1951年二つの鼎を上海博物館に寄贈した。のち大孟鼎は中国歴史博物館の開館に際して北京へ遷されたが、潘達于の百歳を祝って両鼎の特別展が上海博物館で開かれたという興味深い報道¹である。

この一事をもってしても知られるように、大地は人々の倉庫ではないかと思われるほど時代を問わずいろいろなものが埋められている。

弥生時代の銅鐸や武器形祭器とよばれる銅劍・銅矛・銅戈の埋納はたびたびとりあげられ論じられてきたが、青銅器の東アジアでの発祥の地である中国の事例がこれまでほとんど論じられてこなかったのは不思議なことだ。誰が、いつ、何の目的で青銅器を埋めたのかということは、日本の弥生の事例であろうが、中国の殷の事例であろうが答えは容易ではないのは同じではあるが。筆者は2006年7月12日、島根県斐川町立荒神谷博物館の開館記念に講演を依頼され「中国の埋納から銅鐸を考える」というタイトルで話をした。中国における商代から漢代までの主要な青銅器の埋納事例を紹介し、華北と華南での埋納の性格の違いを指摘し、弥生の青銅器の埋納という風

習に関しては華中・華南の大鏡・鐔于・銅鼓といった商から漢代に及ぶ主として楽器の類の埋納と関係が深いあり方ではないかと論じた。²

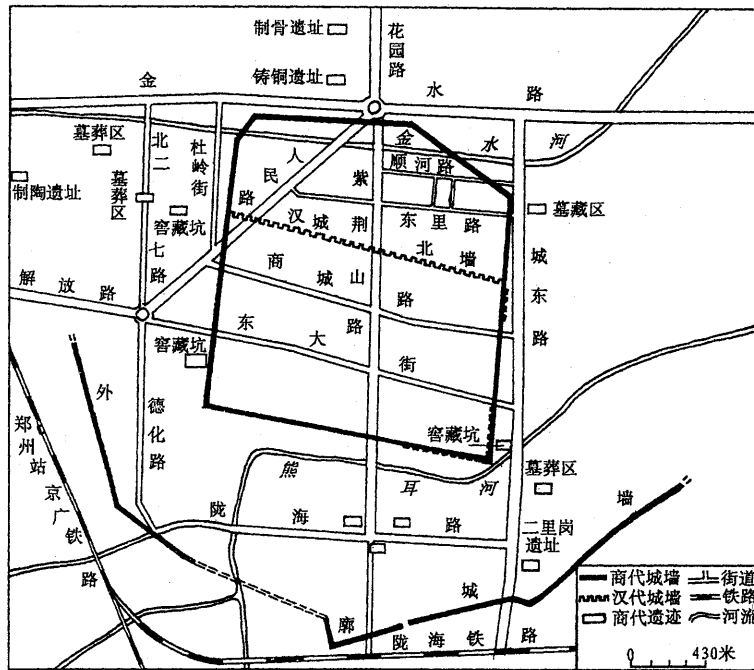
また弥生時代の銅鐸や銅矛が、祖形を中国文化の周縁に位置する青銅器文化に借りながら、形を異様に大きくするというあり方は、中国では「中国内地」の南部の系統に属する戦国時代の巴蜀の銅戈を祖形としつつ、その形を異様に大きくした東南アジアの青銅器文化のあり方³と共通する様相といえる。「中国内地」の南部の系統に属する青銅器文化も、中国文化の周縁に位置する朝鮮の青銅器文化も、中国中原の青銅器文化に起源をもちつつも土着文化の濃厚な要素を加えて文化変容が生じている。さらにそれらの巴蜀や朝鮮で生れた青銅器を祖形としながら、中国中原の文化よりさらに遠隔の地にある東南アジアや日本では、周縁文化の生みだした青銅器を祖形としながらその形を大型化するという方向性を示している。朝鮮青銅器文化には大型化するという傾向はほとんど見られず、青銅器を埋納するという風習も戦国燕の明刀銭（匱刀銭）の埋納⁴がいにはほとんど知られていないことは注目に値しよう。日本の弥生の銅鐸や銅矛が祖形を朝鮮青銅器文化に借りながら、大型化とか埋納するといった風習は、中国の華中・華南や東南アジアの青銅器文化と共通することは、弥生文化の出自の一端を示す重要な証拠といえよう。青銅器の埋納の風習というものも日本だけで考えるのではなく、中国中原、中原類似の文化地域、中国周縁、さらにその外側といった概念をも考慮して広く検討すべきではないかと思う。

中国における青銅器の埋納は一般に窖藏という言葉で表現されている。時代・地域により窖藏の事例とその意味については触れられているものもあるが、商から漢まで中国の華北～華南にわたって全体を見わたして論じたものにはまだお目にかからない。いちいちの事例についてはそのことだけでも議論が多岐にわたり決着をみていないものが非常に多い。というよりも決着をつけるのが困難だといった方が正直なところである。各事例に見解の相違のあることは承知して、広く東アジアの青銅器の全体を見わたすとこんな風にもいえるのではないかということ明らかにすることは、まったく意味のないことでもあるまい。個々の事例の問題点を指摘しながら解決は別の機会を待つということにして、ここでは中国の商から漢までの主として青銅器の埋納のあり方を検討し、その意味を考える。

鄭州商代銅器窖藏⁵

河南省鄭州商城の東西の城壁の外側、張寨南街、向陽回族食品廠、南順城街の3ヵ所から青銅器の埋納坑が発見された(挿図1)。

張寨南街の窖藏 1974年9月、張寨南街⁶で工事中東西方向の長方形土坑内に銅方鼎2個が並び銅鬲1個が東側の鼎内にあるのを発見した〔第1図A1〕。商城の北端に近い西壁外約300mの“杜嶺”と土地の人がよぶ、周囲より4mほど高い地点で地表から約6mの深さのところ



挿図1 鄭州商城遺跡

坑は発見された。鼎の足もとは地山を整えてその上に置かれていた。

杜嶺1号方鼎〔第1図A2・A3〕は西側にあった。通高100、口長62.5、口幅61、腹壁厚0.4cm、重さ約86.4kg。細線饕餮紋と乳釘紋で身を飾り鼎足上方に同じく饕餮紋を、下方に弦紋を飾る。腹底と足にみな使用によるススの痕がついている。

杜嶺2号方鼎〔第1図A4〕は東側に置かれていた。通高87、口長、口幅ともに61cm、腹壁厚0.4cm、重さ約64.25kg。紋様は1号鼎とほぼ同じ、腹底と足に使用によるススの痕がついている。両鼎足とも中空である。

銅鬲⁷〔第1図A5〕は通高35、口径22cmで弦紋や人字紋を身に飾る。腹底にはススの痕がついている。

鼎の腹内と周囲の灰土中から商代二里崗期上層の土器片や石器片が出土している。銅方鼎や銅鬲は紋様の類似から二里崗期上層のもの、埋められた時期も二里崗期上層の時期にあたと報告者⁸はいう。難波純子は二里崗期を四期にわけ（後に二里崗四期を中商一期と変えた）銅器を三期新の段階に、土器は三期とする。⁹ 唐際根は方鼎などの器の年代は比較的早い可能性はあるが、埋納された時期は彼の提唱した中商一期前後ではないかという。¹⁰

向陽回族食品廠窖藏銅器¹¹〔第2図〕 1982年7月11日鄭州商城址の東南外約54mの向陽回族食品廠敷地内で工事中、地下約5mの深さで7件の青銅器—H1：2号方鼎、大圓鼎〔第2図D〕、羊首壺（截頭尊¹²）〔第2図L〕、渦紋中柱盂〔第2図I〕、素面盤〔第2図J〕と2件の牛首尊—を発見した。16日から24日にかけて発掘し地表下4.6mのところまで青銅器の窖藏坑口（H

1) を発見した。工事の作業員によれば大方鼎は東に、大圓鼎は西にあり両鼎は口をつきあわせて坑の南よりに置かれ、他の銅器は尊〔第2図F〕は大方鼎内に、盤は尊の横に、壘は大圓鼎の底部に別の尊〔第2図G〕は圓鼎内に横だおしされ、中柱盃は両鼎の口と口の間にかけていたという。7月21日窖藏坑内の北側を坑口から0.4m掘りさげた時、H1：8号方鼎が口を東、足を西にして坑底に横向きに置かれ腹内に提梁卣〔第2図K1・K2〕、觚〔第2図H〕2、扁足鼎〔第2図E〕2の5件の銅器があった。

窖藏坑H1〔第2図A〕は正方形に近く東西長1.7m、南北幅1.62m、深さ0.9mで坑の底は商代の長方形灰坑H4の上部をこわしているが、大部分は地山を掘りこんでいる。坑の填土内には長頸大口尊などの土器片、獣骨とブタの歯などがあった。調査の際、トレンチ北壁の地層図が作成され、窖藏坑は第五層灰土層下の生土層（地山）内に掘りこまれている。灰坑H1・H2・H3・H4がいずれも同様な状況で、ただH1はH4を一部こわして掘られていることは先に触れた。第五層は報告者によれば商代二里崗期上層文化層だという。

H1：2号方鼎〔第2図C1・C2〕は身に粗線饗饗紋と乳釘紋を飾る。対角の両足に半周の弦紋をつけ他の両足にはない。足は中空である。腹壁、底、足の間にはスス痕がある。通高81cm、口長55、口幅53、底長46、底幅44、壁厚0.7cm、重さ約75kg。身の饗饗紋は燕尾形¹³を呈するH1：8号方鼎より発達した羽根で構成されている。H1：8号方鼎より時期の下るものかと判断される。

H1：8号方鼎〔第2図B1・B2〕は身に燕尾形の細線饗饗紋を足にも同様な紋様を飾りさらに三条の弦紋をつける。腹壁、底、足の間にはスス痕がある。通高81cm、口長、口幅ともに53cm、底長、底幅各42cm、壁厚0.6～0.8cm、重さ52kg、足は中空である。H1：2号とH1：8号方鼎は大きさがほぼ同じでありながら重さが23kgもちがうのは鑄造技法のちがいにあるようだ。

二里崗期の青銅器を分析した難波は向陽回族食品廠窖藏坑出土の方鼎・圓鼎・扁足鼎、觚2件、尊2件を銅四期とし、土器の大口尊を陶四期とした。¹⁴ 唐際根の中商式の提唱を受けいれて自身の二里崗三期は早商三期とし、銅四期、陶四期はともに中商一期と変更した。¹⁵ 向陽回族食品廠出土の青銅器のうち、H1：2号方鼎、圓鼎、扁足鼎2件、觚2件、尊2件、截頭尊（羊首壘）、提梁卣、中柱盃を中商期に比定した。また坑内より出土した長頸大口尊と鬲及び第五層出土の折沿鬲、盆、長頸大口尊を中商一期相当と唐際根は判定している。なおH1：8号方鼎は難波のいう岐尾饗饗（筆者のいう燕尾饗饗）をもち早商期のものと判断される。唐はこの土坑は祭祀活動に関係するものであろうというが理由は示さない。¹⁶

南順城街の銅器窖藏¹⁷〔第3図・第4図〕 1996年2月6日鄭州商城の西城壁外側で南の角に近いところを工事し、杭穴を掘っていた時に窖藏坑を発見し杭穴から青銅器が見えた。ただちに工事は中止され周辺のボーリング調査を実施した後、2月28日から発掘を開始した。窖藏坑〔第3図A〕は城壁の外壕の西側の台地に位置し、地表より深さ約4.9mで発見された坑口は西半分

が長方形で東半分は楕圓形状を呈した不規則なものであった。坑口の東西長は2.1m、南北の最も幅の広いところは1.2m、狭いところで0.65mである。坑の上半部は垂直に近いが、中間では四壁の生土（地山）を掘り拡げてあり東西長2.34、南北幅1.87mを測る。坑壁の下部はカーブを描いて収まり長方形平底に近い。底部東西長1.42、南北幅0.60mであった。坑の深さは4.26mである。

青銅器12件は坑内の中部よりやや下側で発見されたが、上面に木板を置きその上には木を保護するためか朱砂が塗抹されていたと思える。青銅器の下面にも同じような状況がみられ、青銅器上下両面を木板で守っていた。

方鼎4、罍2、爵2、簋1、戈2、鉞1からなる。方鼎は口を上にして坑の北側西よりに置かれていた。坑底より0.8m高いところ。1号方鼎の中に2号方鼎が置かれ、3号・4号方鼎は1号方鼎の左右に置かれ、罍、爵、戈、鉞は2号方鼎内に納められていた。簋は2号方鼎の口の上に本来置かれていたものが、1号方鼎の南側にずり落ちていた。

青銅器の下面、木板や朱砂の層の下には土器類が埋まっており手づくねの罐の類のあることから、この坑自体はもともと井戸として利用されていたものを青銅器を埋めるにあたって一部拡張し再利用されたものと判断されている。

饕餮紋方鼎（H1上：1）〔第4図A1・A2〕 羽根で構成される後尾をもつ粗線饕餮紋を身に飾る。足にも三弦紋の上に角の大きい饕餮を飾る。鼎の底と腹壁には長期にわたり使用された結果できたスス痕が一層付着している。通高83cm、口長51.5、口幅51.2cm、最も薄いところは0.5、厚いところで1cm、重さ52.9kg。

饕餮紋方鼎（H1上：2）〔第3図D1・D2〕 燕尾形で稚拙な感じの細線饕餮紋を身に飾る。四角の乳釘紋と接するところにH1上：1号方鼎などでは横向きの顔面を主とした饕餮を飾るが、この鼎は乳釘紋の帯で切られている。足は上下の弦紋の間に縦方向に鋸歯状の紋様をいれている。底と腹壁にはススの痕を留める。通高72.5cm、口長44.5、口幅43.5cm、重さ26.7kg。

乳釘紋方鼎（H1上：3）〔第3図C1・C2〕 身に饕餮紋を飾らない。帯状の部分、饕餮のかわりに乳釘紋。足は上下を弦紋で画し、上方は弦紋の間に一列乳釘紋を飾り、画された部分には細線で三角形の重なりを交互に鑄出している。底にはスス痕。通高64cm、口長42.5、口幅42cm、重さ21.4kg

乳釘紋方鼎（H1上：4）〔第3図B1・B2〕 乳釘紋だけを身に帯状に飾る。身の正面と四角の部分に帯状に乳釘紋を飾るのは、H1上：3号方鼎と同じであるが、底部を構成する部分に先のは二列これは一列乳釘紋を飾る。足は弦紋で上下を画しその間に三角形を重ねた細線紋を交互に描く。足の表面にスス痕。通高は59cm、口長38、口幅36cm、重さ20.3kg。

乳釘紋は二里崗上層一期の陶方鼎に類似のものがある。足の弦紋に画された中に縦にいれられた鋭い線状の三角形風の紋様は、二里頭三期や四期の爵の把手や身につけられた線とよく似てい

る。

乳釘紋だけを飾るH1上：3号、H1上：4号方鼎は二里崗でも早い段階、早商早期、稚拙な饗饗紋を飾るH1上：2号方鼎は向陽回族食品廠8号方鼎などの燕尾形饗饗より少し早い段階、早商中期、H1上：1号方鼎は向陽回族食品廠2号方鼎と似かよった時期、中商一期頃にそれぞれ比定されようか。

罍2件 通高40.4cmのもの〔第4図B1・B2〕と通高26.6cmのもの〔第4図C1・C2〕。器形・紋様ともにほぼ同じでセットを構成したものか。尾をまきあげ羽根の発達した饗饗紋を胴中央と胴下部に飾る。難波のいう中商式粗線饗饗紋鄭州出土型の尊・甗のものに類似する。あるいは殷墟出土1類に似る。¹⁸ 中商一期か二期。

爵2件 単柱爵〔第4図D1・D2〕と双柱爵〔第4図E1・E2〕で胴部中央、圓圈で画された中に粗線饗饗紋を鑄出する。難波は中商二期古段階という。¹⁹

盂 報告書では簋となっているが、圈足が低く小さいので盂の方がよいと思う。

戈2件 闌の上下が凸出し〔第4図F・G〕上援が少しカーブする。内に一円孔、長27cmと27.3cmとほぼ類似したタイプ。内の孔の有無は別にして二里崗上層一期の戈²⁰に類似する。

鉞 凸字形、内と両肩に穿、身のほぼ中央に円孔を開けている〔第4図H〕。通長17.1cm。これも二里崗上層一期（早商三期）の頃ののものか。

青銅器群の下層、木板の痕跡と朱砂の層より下層の土坑内から発見された鬲・大口尊・簋などの土器は中商一期に相当するという。また青銅器群の上面の木板痕や朱砂の層より上層の土坑内から出土したうち、年代的にみて最も遅い土器には鬲や爵があり中商二期から三期に相当するという。²¹

南順城街の青銅器群は方鼎が二里崗下層か二里崗上層一期との間、なかには中商一期の製作かというものを含み、罍や爵は少くとも中商一期以後の製作になる。しかも井戸の下方の土器は中商一期、青銅器の窖藏を形成して後埋めもどされた土の中には中商二期から三期にも比定される土器を含んでいるという結果になる。窖藏坑の形成は中商二期もしくは三期に下るとのことだ。

方鼎をめぐる

方鼎の鑄造法 3ヵ所の銅器窖藏坑から出土した8件の方鼎をとりあげて鑄造技術の検討を行った李京華らによると、方鼎は拼鑄法（連結鑄造技法とよんでおく）という苦労した鑄造技術によっていることが明らかになった。²²

向陽回族食品廠H1：8号方鼎（以後向陽H1：8号方鼎と略す）と張寨南街1号方鼎（以後杜嶺1号方鼎と略す）を検討したところ、向陽H1：8号方鼎の方がより原始的な拼鑄法で鑄造されていることがわかった。拼鑄法〔第1図F1・F2〕というのは方鼎四面の中壁部分（ここ

には乳釘紋あるいは饗饗紋を中段に、下段には乳釘紋がある)と四角の角壁部分(中段に饗饗紋を鑄出するものと、すべて乳釘紋からなる場合とある)、鼎底、鼎足を鑄型のほぞ、ほぞ穴を利用して順番に継ぎ足すように鑄造する方法である。同時代(二里崗期)の圓鼎の場合はこんなやっかいな方法でなく基本的に渾鑄法(一体鑄造法と表現しておく)を用いて製作された。鑄型全体を内型も含めてすべて組み合わせて銅器を一度に鑄造する方法である。罍や爵や觚の場合も附属品は別にして基本的には渾鑄法によった。

向陽H1:8号方鼎がより原始的な鑄造法によっているというのは、李京華によれば饗饗紋を含む中壁上段部分と底部のすぐ上にくる中壁下段の部分が別々で拼鑄されたものであるのに対し、杜嶺1号方鼎の場合は拼鑄法によって鑄造されているのは同じだが、中壁上段と下段は最初から一枚ものとして鑄造されているからだという。

南順城街窖藏坑から発見された4件の方鼎南順H1上:1号、南順H1上:2号、南順H1上:3号、南順H1上:4号を検討した。いずれも拼鑄法によっているが、そのうち3件は向陽H1:8号方鼎よりも更に原始的な鑄造法によっているという。²³ その結果、李京華は鄭州の8件の方鼎を鑄造技術の進歩という観点からみて最も原始的なものから進んだものへ順番をつけた。南順H1上:4号方鼎、南順H1上:3号方鼎、南順H1上:2号方鼎の3件はこの順に鑄造された可能性が高く、二里崗下層期(早商一期あるいは二期)に相当するかも知れない。向陽H1:8号方鼎は二里崗下層期と上層期の間に鑄造された可能性があるのではないかと。南順H1上:1号方鼎と向陽H1:2号方鼎は最も遅く、二里崗上層期なのかは他の青銅器との総合的研究が必要だろうという。杜嶺1号・2号方鼎については1号が向陽H1:8号方鼎より進んだ拼鑄技術によっていると指摘している以外触れられていない。単純に方鼎の通高を比較すると李京華の鑄造技法の検討による製作年代順は、小から大となっている。もしそうなら杜嶺2号、杜嶺1号の順番になると思えるが。

方鼎の紋様からみて、乳釘紋を中壁上段に帯状に飾る南順H1上:4号、H1上:3号方鼎は他に比べて早い段階のものであろう。饗饗紋の稚拙な南順H1上:2号方鼎が次にくるのも理解できる。この3方鼎の足の鋭い細線三角紋は、二里頭三・四期の陶爵や罍の蓋や身に表現されたものを受けついだものと思う。細線饗饗紋で燕尾の明確な向陽H1:8号方鼎、燕尾をとどめながらさらに上方に巻き上げる尾のみられ始めた細線饗饗紋をもつ杜嶺1号方鼎、杜嶺2号方鼎の順になるのか。向陽H1:2号方鼎と南順H1上:1号方鼎は粗線饗饗紋で燕尾を羽根表現風に表わした違いがみられる。南順H1上:1号方鼎の足に表現された、細線紋の方鼎グループより複雑化した饗饗からみて最も製作がおくれるのはこれらの両方鼎ではないか。細線饗饗紋をもつ3方鼎が早商三期(二里崗上層一期)とするなら、後者の両方鼎の製作はあるいは中商一期に下る可能性もある。

方鼎の法量〔第1表〕 青銅方鼎は二里崗期に突然あらわれその巨大さで人を驚かせる。通高

第1表 方鼎の法量

出土地		通高	口長	口幅	厚さcm	重kg	備考
1	張寨南街1号 (杜嶺1号)	100	62.5	61	0.4	86.4	
2	張寨南街2号 (杜嶺2号)	87	61 *67	61	0.4	64.25	*張国碩による
3	向陽回族 食品廠2号	81	55 (底46)	53 (44)	0.7	75	
4	向陽回族 食品廠8号	81	53 (底42)	53 (42)	0.6~0.8	52	
5	南順城街1号	83	51.5	51.2	0.5~1	52.9	
6	南順城街2号	72.5	44.5	43.5		26.7	
7	南順城街3号	64	42.5	42		21.4	
8	南順城街4号	59	38	36		20.3	
9	山西平陸前庄	82	50	50			
10	江西新干 乳釘紋虎耳方鼎	97 87.5 (耳の上の虎を除く)	58	49.3	0.4	49	
11	江西新干 獸面紋立耳方鼎	54	37	35		10.1	
12	司母辛大方鼎 (婦好墓)	80.1	64	48		128	
13	司母辛大方鼎 (婦好墓)	80	64	47.6	0.8	117.5	
14	牛鼎 (侯家莊M1004号大墓)	73.3 [74	64.2 64	45.4 45]		110.4	[] 陳夢家
15	鹿鼎 (侯家莊M1004号大墓)	60.9	51.4	37.4		60.4	
16	司母戊方鼎 (殷墟M260号墓)	133	110 [106	78 71	6	875 1400]	[] 陳夢家
17	遼寧喀左北洞 2号坑方鼎	52	40.6	30.6			
18	太保方鼎 (天津市芸術博物館)	50.5	36	23			

が50cm以上ある方鼎を林巳奈夫の殷周青銅器綜覧を参考にしながら集めてみた。²⁴ 鄭州商城の窖藏坑出土の8件²⁵が、山西省平陸前庄の饗饗紋方鼎〔第1図D〕や江西省新干大墓出土の虎耳方鼎〔第1図E〕と獸面紋立耳方鼎の2件²⁶があげられる。平陸のは杜嶺1号・2号方鼎など早商三期の方鼎をモデルにしていると紋様・法量からは考えられるが、饗饗紋は原則をきちんと理解して描いているとは考え難く、足の上半につけられた饗饗も本来は四角の外側に顔をむける筈のものが、尾の合せ目の方が外側を向くなど鄭州の工房で製作されたものかどうか疑わしい。新干の虎耳方鼎もモチーフは杜嶺1号方鼎などに由来すると思えるが、足の上半につく饗饗紋の

時期が下ることなどを理由に、林巳奈夫の殷後期Ⅲ～西周Ⅰの間に比定する意見がある。²⁷ 新千の獸面紋立耳方鼎はモチーフからみて司母戊方鼎²⁸などが影響をしているのかと判断する。

晩商期の殷墟期になると婦好墓²⁹から司母辛大方鼎〔第5図A1・A2〕が2件、侯家荘M1004号大墓³⁰から牛鼎〔第5図C1・C2〕と鹿鼎〔第5図D1・D2〕、殷墟M260号墓³¹出土が確定された司母戊方鼎〔第5図B1～B4〕がある。殷墟M260号墓は武丁か祖甲の妣戊の墓に比定され、婦好墓が武丁の法定配偶の一人妣辛の墓としていずれも殷墟期二期に、侯家荘M1004号大墓は殷墟期三期に比定する考えがある。林巳奈夫の編年では晩商期のこれらの方鼎は殷後期Ⅱとされる。さらに遼寧省喀左北洞村2号窖藏坑出土方鼎³²は林の殷後期Ⅲに出土地不明で天津市芸術博物館所藏の太保方鼎³³は林の西周ⅠBとされている。

早商期から西周早期後葉までみられる方鼎は以上の18件、早商～中商の方鼎9件、晩商期の方鼎8件、西周早期後葉の方鼎1件となる。なお方鼎の口長と口幅の関係もみた。両者の差が2cm以内のもの10件³⁴、10cm以上のものが7件、新千虎耳方鼎が8.7cmと両者の中間的な状況を示している。方形に近い早商期のものから長方形になる晩商期のものへとの変化が見てとれる。なお早商期の方鼎が拼鑄法によって鑄造されたのに対し、殷墟二期以後の方鼎は鑄型を耳いがいはあらかじめすべて組み合わせた渾鑄法に近い方法³⁵〔第1図G〕によって鑄造されるようになるという大きな変化が認められる。

同時代の他のタイプの鼎でも通高50cmを超えるものを林巳奈夫の資料³⁶を基本にチェックしてみた。圓鼎28件、鬲鼎0件³⁷、扁足鼎0件、鬲1件を得た。鬲は西周Ⅱ期という。

圓鼎の最大のもは通高122cmの陝西省淳化史家塬出土の饗饗紋圓鼎（西周ⅠB）、ついで近年中国が買いもどしたという河南省輝県出土かといわれる子龍鼎³⁸が通高103cm（殷後期Ⅲか）、3位がこの文章のはじめに触れた潘達于が上海博物館に寄贈し現在は北京の国家博物館に収蔵されている大孟鼎（西周ⅠB）が101.9cmで100cmを超える大圓鼎はこれまでのところ28件のうち3件だけである。林の資料に基づいて50cm以上の圓鼎を時期別に列べると、殷後期Ⅱが3件、殷後期Ⅲが2件、西周ⅠAのもの6件、西周ⅠBのもの5件、西周ⅡBが4件、西周ⅢAのもの1件、西周ⅢBのもの5件、地方形として時期を示さないもの2件となる。先の通高の大きいものが殷末と西周康王の頃にあるのに対応するあり様を示している。

以上のことから伺えるのは、方鼎が重要視されたのは鄭州商城が首都であった早商期から中商一期が最高で、ついでは安陽に首都が遷った晩商期それも武丁期を中心としてである。圓鼎の巨大なものは早商から中商にかけては見あたらず、殷墟二期以後あらわれ、西周前期に最も盛行する。方鼎の巨大化にとってかわったといえる。それは西周王朝の興起とともにそのシンボルに圓鼎になったといいかえることができるかも知れない。

方鼎の初現は二里頭文化三期の陶鼎³⁹〔第1図B〕にある。通高25.6cm、口長・口幅各20.6cm、底長・底幅14.1～14.5cm、外面に黒衣を塗り三角形の足痕ということは錐足のことか、上半に凸

弦紋三周をめぐらし、底に近い側面には三角水波形凸弦紋がみられる。更に1995年考古研究所主催の第1回商文化国際学術討論会が偃師で行われ研究発表した際に、二里頭工作站で展示されていた土器群の中に陶方鼎〔第1図C2〕1件があった。一部石膏復元されている部分もあるが、方鼎は各面に太い刻線で太陽紋やもしかすれば獣面紋（これらの面も太陽ののぼりかけ、半分などを表現したものか）かと思えるものを描いている。各面底部に近い側面から足にかけて几字状の刻線をも描く。錐足である。大きさは10数cmの高さ、口径は長幅とも似たもの、その資料の絵⁴⁰が文物報を見ていると出ていたので図面の書きおこしの太陽の線が少しすくないようだがあげておく〔第1図C1〕。

太陽をシンボルとしてそれをモチーフとする文化は、林巳奈夫が最後までこだわったように河姆渡にあり良渚にあり山東龍山文化にも見られた。時期について見解のわかれている三星堆文化にも太陽の樹だとして若木に比定されているイヌワシの止まる青銅樹は有名だ。⁴¹

二里頭文化が夏で鄭州商城が大乙（成湯）の建てた亳なら、夏文化のなかに生れた太陽神崇拝のシンボルとされたかも知れぬ陶方鼎をとりあげて巨大な青銅方鼎にしたてあげ、商王朝のシンボルとしたのは湯王であったかも知れない。その方鼎は武丁の頃には王の法定配偶のシンボルと変化しつつあったのではないか。婦好墓からの巨大な方鼎2件の出土は、おそらく北方の遊牧系の民族から入手したかそれをモデルにして製作した太陽光線をイメージした綾杉紋や直線紋を鏡背に鑄出した銅鏡⁴²の存在とともに、太陽崇拝の担い手が変わりつつあったことをも暗示しているのか。

商王朝の方鼎重視から王権のシンボルを圓鼎へと変えたのは、その芽は武丁期にあったとはいえ、武王以後の西周王朝であった。

『墨子・耕柱篇』には「昔、夏后開は蜚廉をして金を山川に折らしめ、而して之を昆吾に陶鑄せしむ。…鼎成る。四足にして方。…九鼎すでに成り三国に遷る。夏后氏、之を失い殷人之を受け、殷人之を失い周人之を受けとれり」と。九鼎は方鼎だった。

唐蘭は『西周青銅器銘文分代史徴』巻三上・康王のところ作冊大鼎の銘の注釈で、「武王成王異鼎」とある異は翼と通じ附耳の方鼎のことだとする。『史記・楚世家』に「居三代之伝器、吞三翮六翼以高世主」とあるのを引き、夏代に鑄造された九鼎のことで、三件は鬲形の空足鼎、六件は附耳の方鼎だとした。⁴³ ちなみに林巳奈夫によれば附耳の方鼎はメトロポリタン博物館蔵の殷後期Ⅲのものが初現で、河北省房山琉璃河M253号墓出土圜方鼎など西周ⅠB期のものがそれにつぐものである。⁴⁴

いずれにしても夏王朝の陶方鼎が商王朝では巨大な青銅方鼎と化し、西周王朝では晩商期に巨大化しつつあった圓鼎の方を彼等自身の王権のシンボルとした流れがよく理解できる。孔子⁴⁵のいう殷人の礼は夏人の礼を損益したものであり、周人の礼は殷人の礼を損益したものであるというのは、こんなところにもあらわれているといえそうだ。

いつ、なぜ、誰が

鄭州商城の城壁の外側、壕の外側の他よりは一段と小高い丘陵上に3ヵ所、まるで三方から城壁を囲むようにして偶然にも巨大な青銅方鼎を含む貴重な青銅器群が窖藏坑より発見された。いくつかの見解が発表されている。

河南省文物研究所長だった安金槐⁴⁶は、張寨南街H1と向陽回族食品廠H1の両窖藏坑が発見された時に、それら窖藏坑の掘られた状況、深さ、青銅器の埋置状況、青銅器の大なること、製作の精緻であること、坑の近くにそれぞれ重要な二里崗期の墓葬のあることなどを考慮して二里崗期の貴族が某種の祭祀活動を行い意識的に埋めたもので、なんらかの慌しい状況でいそいで掘った坑内にそそくさと銅器を入れたものではないとした。後を継いだ楊育彬も同じような見解⁴⁷である。

南順城街の窖藏坑が発見された時、発掘に先立って周辺のボーリング調査を実施した宋国定や曾曉敏は、3ヵ所の坑の状況はきちんと整えられたといった類のものではなく、なかでも南順城街の窖藏坑は廃棄された井戸を再利用し形を整えたものである。坑の最低部から一群の水汲み用の土器がでてることよりわかる。だからこれら3ヵ所の窖藏坑は商王室が危険な状況下に陥り込んだ時、多数の青銅重器をもって逃れるすべがなく臨時に地下に埋藏したものだという。⁴⁸

陳旭は鄭州市の西北約20kmにある小双橋遺跡を隄（囂）都だとする説を提唱した。⁴⁹そして鄭州で発見されたこれら8件の方鼎が窖藏された理由として、早商王朝が湯王より仲丁にいたった時、「嫡を廃して更に諸弟子を立てた⁵⁰」ことにより王室内部に権力闘争が起り内乱が発生し、その結果王室が国家統治権力の象徴である重器を埋藏するにいたったのだとする。また李京華の方鼎の鑄造技法の分析結果を考慮して、8件の方鼎は最小の南順城街H1上：4号方鼎が南関外期に、最大の杜嶺1号方鼎は二里崗上層期（白家庄期と区別されているので今でいう早商三期あるいは二里崗上層一期）の製作になるとした。また早商王朝の五世十王がそれぞれ方鼎を1件づつ製作した可能性のあること、埋藏坑の年代はいずれも白家庄期で仲丁の時にあたること、仲丁の時に発生した内乱から王室の重器が他人の手に落ち入ることを避けるために埋めたものだとした。⁵¹

鄭州窖藏坑の報告書を作成した人達は、陳旭の考えの方に傾いている。⁵²

一方土器の分析から中商期を提唱した唐際根⁵³は陳旭と同じように仲丁の隄都遷都を重視するが、自身の土器編年と難波の銅器編年を踏まえて陳旭とは少しニュアンスを異にしている。彼によれば張寨南街杜嶺銅器窖藏坑の年代は方鼎などの器がやや古い可能性はあるものの中商一期前後。向陽回族食品廠銅器窖藏坑の年代は銅器の一部に中商期に属する卣・尊などを含んでおり、土器にも中商一期に相当するものがある。この土坑は祭祀活動に関係するものだろうというが、それ以上のことは触れない。

南順城街銅器窖藏坑については、銅器の埽とか爵は中商一期もしくは二期相当のものがあること、土坑の青銅器より下層から出土した土器には中商一期に相当するものがあり、土坑の上層出土の土器の中には中商二期から三期に相当するものがあるという。

早商期は大乙から大戊の五代に、中商は仲丁から小乙の五代に晩商は武丁から帝辛の七代に相当するとする。そのうち仲丁、南庚、陽甲の王位は正常な継承によっていないのではないか。仲丁くらい盤庚に至るまで「比九世乱」と称せられるほど都をたびたび移した記録があり、複雑な政治闘争があったことを伺わせると。

窖藏坑が形成された原因を「比九世乱」に求めるのは陳旭と同じであるが、陳旭が3坑とも白家庄期（中商一期）とし仲丁の儼都遷都と結びつけるのに対して、唐際根は杜嶺と向陽回民廐の窖藏は中商一期とするものの、南順城街の窖藏坑の形成された年代は中商二期もしくは三期と判断しているので盤庚・小辛・小乙三王に至る時期にあたるという。王権をめぐっての闘争の結果ということになるのかは明確に書かれていない。向陽回民廐の窖藏について祭祀だろうといい、どんな祭祀かについて触れていないのがよくその心を示している。陳旭より土器にくわしく遺跡の状況を知るだけにすべて単純に仲丁の亳を捨てて儼遷都と結びつけて解釈できないものと思う。

鄭州商城の歴史

ごくかいつまんで関連しそうなことだけを摘記する。鄭州商城の建造（城壁の調査に基づく）は商代二里崗下層二期（早商一期）、使用期間は二里崗下層二期から二里崗上層一期（早商三期）まで継続した商代早期の城跡だと報告書⁵⁴はいう。張立東⁵⁵によると城壁内東北部の大型宮殿・城壁及び南半分を囲む外郭城壁の修築は早商二期（二里崗下層一期）に最も盛んな段階に入った。

宮殿区南部に多数の版築基壇と紫荊山の大型鑄銅工房の出現や多数の墓地が認められるのは早商三期に最高に達している。この時偃師商城は衰落に向っている。偃師商城の主たる活動の時期は早商一・二期である。中商一期になると偃師商城はまったく荒廃している。一方鄭州商城内の一群の宮殿と紫荊山北及び南関外の2ヵ所の鑄銅工房は、この期間も継続して使用されている。3ヵ所の銅器窖藏の性質に関しては異なる見方があるが、その埋藏時期はすべて中商時期で、このことは鄭州商城は少くとも中商一期にあっても王室と貴族の活動のあった証拠であるという。

廟號新考の援用

方鼎が早商期王権のシンボルであったとすると、誰が滅るあるいは滅びた早商王朝の首都亳の城壁外壕外の小高い丘陵、しかも内城壁の西北、西南、東南の三方ほぼ相似た地形を選んで埋めたのか。

この時張光直によって復元された殷王室の王位継承のシステム⁵⁶を参考にすると、これまであまり立ちいって考えられなかった遷都の様子が浮んでくる。陳旭は3窖藏坑出土の方鼎を大乙から大戊にいたる五世十王に比定し、2鼎はそのうちどこからでてくるだろうとした。⁵⁷しかし紋様からみて南順城街H1上：1号方鼎と向陽回民廠H1：2号方鼎は中商一期に製作されたものではないかと考えられることは先に触れた。それはさておき張光直は『史記・殷本紀』の王系と陳夢家の復元した周祭卜辞をもとにして殷王世系を自身の研究成果に基づき改訂した。三者を第2表～第4表に示した。これに成湯以後盤庚にいたる間の遷都⁵⁸を重ねる。

張光直の商王廟號の分析からすると、殷王の位につく資格をもつのは子姓の甲乙組と丁組の両者でそれが交互に執政権を握った。同世代では兄が死ぬと同組の弟に王位は及び、兄弟がつきると次世代の王は当代の王とは別組から必ず立つシステムが復元できるという。

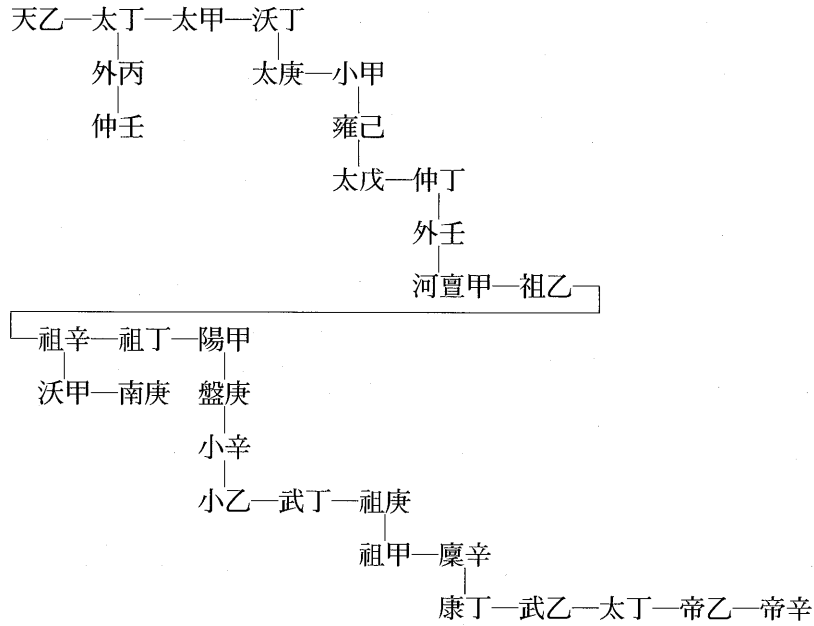
大乙成湯は契の住んだ亳に首都を定めた。鄭州商城で、その時王権のシンボルとして夏王朝の太陽神のシンボル小陶方鼎を借り、それを青銅で鋳あげ巨大な大銅方鼎とした。五世十王が亳に住んだが、丁組からでた仲丁は都を隄に遷した。『史記』殷本紀がほんとなら太戊は伊陟という名相の補佐を得て雍己の時衰えていた殷の道を復興し、諸侯がまた之に帰していたというのに、繁栄している首都を捨ててなぜ仲丁は遷都したのか？

唐際根は本来は小甲の子が位をつぐべきであったのに、実際の王位を継承したのは大戊の子の仲丁であった。王位の継承の非正常を遷都の理由にあげる⁵⁹が、これは張光直の王位即位乙丁組交替方式をとると合点できない。また沃丁―太庚のときも例えば太庚の子、小甲が即位していて仲丁の場合と同じである。仲丁―外壬―河亶甲のあと仲丁の子でなく河亶甲の子、祖乙へとなっているなど必ずしも長子相続とは限らない。また張光直の復元した乙丁制によれば、唐際根が問題にしたところは、小甲・雍己・大戊は兄弟なので仲丁が小甲の子供でなかったのに王位を継いだから争いになったというよりは、大乙（成湯）にはじまる一方の組（甲・乙組）の建てた亳から、もう一方の組（同じ子姓の丁組）からでた仲丁が新しく都を隄に遷したと理解できる。

むしろ両組が交互に王位につき、そういったシステムをゆるぎなく維持し続けるには、成湯から沃丁の代まで力を奮った伊尹や太戊の時の相、伊陟あるいは祖乙のときの巫賢などに代表される長老達の力が当然強力な中で、新王に即位した自分が長老会の制約をのがれて自分の望む政治をとり行うには新都への移転ということが、一つの強力な手段としてあった、あり得たのではないか。

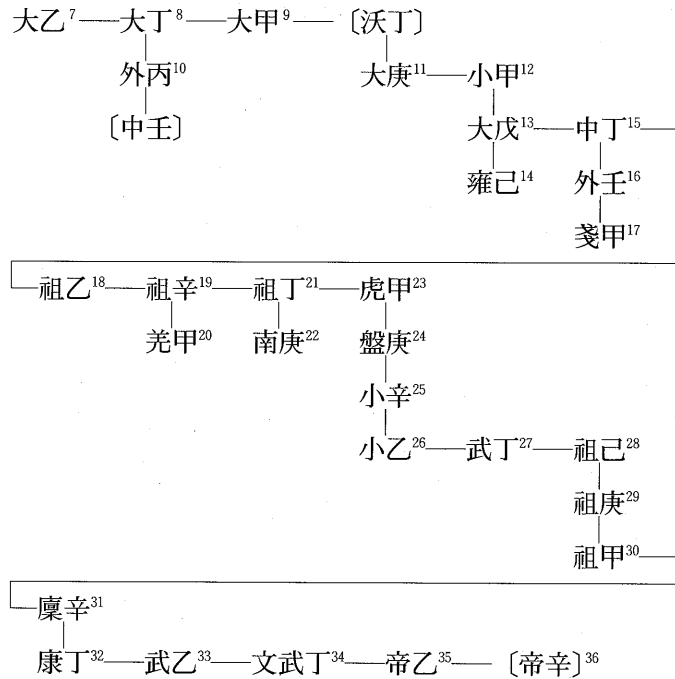
隄（囂）に遷った仲丁と外壬は11年と5年それぞれ王位についた。⁶⁰この時、毫もまだ滅びたわけではない。張立東と河毓靈⁶¹の間の見解は少し異なるが少くとも中商一期、先にも触れたように鄭州南北の鑄銅工房は活発に働き、宮殿区もなお一部生きていた。杜嶺の青銅器を受けついだのは丁組で、隄への遷都の時あるいは仲丁・外壬のいずれかの段階で、毫という土地と結びついた祖先神を祭る青銅器を埋納したものであろう。戦乱で運べないからだという理由はとらない。

第2表 『史記・殷本紀』 殷王世系



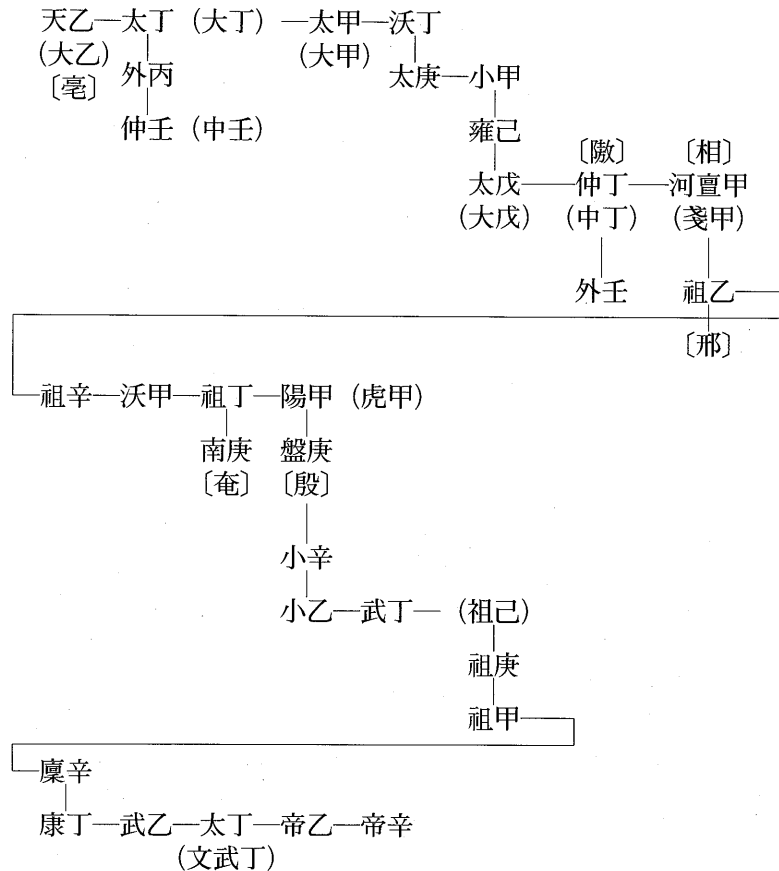
注 横線は世次を表し、左は父、右は子、縦線は兄弟関係、上は兄、下は弟。
 なお本論に關係の深い天乙以後にした。

第3表 卜辞殷王世系



注 第2表と同じように大乙以下を表示した。右上の数字は位についた順序を示す。
 [] 内の王名は卜辞の周祭祀典中には欠けている。

第4表 張光直による乙丁制



注 () 内は卜辞の廟號 [] 内は『史記・殷本紀』による都
 甲乙組 (甲・乙・戊・己) 第三組 (庚・辛)
 丁組 (丙・丁・壬・癸)

また単なる祭祀ではない。遷都にあたりその土地の精霊のこめられた方鼎をもち運ぶことは出来なかったからだと考える。

張光直によれば仲丁—外壬—河亶甲の兄弟関係は乙丁制からいって難があり、仲丁—外壬と河亶甲を切り離し、河亶甲を祖乙の兄の位置におく『漢書・古今人表』の見解を採用する。すると丁組の建てた隰から相へ遷ったのは甲乙組の河亶甲となり、弟の祖乙は更に邢(耿)へ移ったということになる。

『史記』殷本紀の書きぶりは帝仲丁が即位した時、隰へ遷都したのに対応して河亶甲と祖乙も相とか邢に自分の住むところを定めた意に読みとれる。普通どこに都にしたかはその帝の記述の時に書くのに、河亶甲と祖乙については次に帝位についた外壬のことより先に、仲丁が隰に遷った時、ひきつづいて河亶甲は相に居し(『御覽』の引く『史記』にはそのあと値の字が入る)、祖乙が邢に遷ったことをいう。⁶² このことは帝位につく以前、仲丁の即位と遷都と同時に河亶甲も

から銅器に置き換えられたものから、素紋→弦紋→乳釘紋→饕餮紋（獸面紋）の器表への採用が始ったと理解した方がよさそうに思える。帝とか土地神といった話も本格的に出来上るのは安陽に首都が遷った殷墟期以後のことかも知れない。鄭州商城が首都であった時代は、新石器時代以来の太陽神崇拜と大地と結びついた青銅器とが折り合いをつける試行期間だったといえよう。

『礼記』の祭法には「泰壇に燔柴するは天を祭る也、泰折（祭地の壇^{えいまい}）に瘞埋^{えいまい}するは地を祭る也、駢犢（赤黄色の小牛^{せいとく}⁶⁹）を用いる」とある。『爾雅・釋天・祭名』には「…天を祭るを燔柴といい、地を祭るを瘞^{えいまい}といい、山川を祭るを廢^{きけん}といい、川を祭るを浮沈という…」とある。

張寨南街の窖藏坑は工事中の発見ではあるが鼎腹内と周囲の灰土中から土器片や石器とともに人骨と獣骨が出土しているという。向陽回族食品廠銅器窖藏坑H1の下面には灰坑H4が、周囲に灰坑H2、H3がいずれも第五層の下面から掘り下げられていた。灰坑H2からは土器片・石器片が、灰坑H3からは土器片のほかに獣骨が、H4からは土器片のほかに一群の牛骨が発見されている。H1とH2-H4の灰坑は関連があるものとみてなんらかの祭祀行為があったと考える研究者が多い。いずれの坑も地を祭るという行為を伴っていた可能性がある。

甲乙組、丁組それぞれに出自の亳で、王権のシンボルとしての方鼎をもち伝えていたものであろう。亳を去るに際して父祖の最も関係深い地であり、その土地の精霊の鑄出された方鼎を、亳の都城を守るような位置に、大地を祭る儀礼をとり行った後、埋めたのではなかろうか。

小南はまた宗廟の銅器は普段は大地に埋められていたのではないかという興味深い見解⁷⁰も述べているが、鄭州の3ヵ所の窖藏にはあてはまらないのではなかろうか。今後、資料に基づいてそういった考え方が成り立つものかどうかについても検討を重ねたい。

鄭州の窖藏が中商期に形成されたものであることは、唐際根の中商期の土器研究の成果が役割を果たしたといえる。中商期の青銅器窖藏はもう1ヵ所、河南省安陽市の洹水北岸の洹北商城の西側城壁に近い三家庄から、農民が土を耕している時に発見された。⁷¹ 圓鼎4件、甗1件、罍1件、鏹1件、戈1件の8件である。器は圓鼎の1件が通高43.6cm、重さ99kgという大きなものいがい一般的といえる。時期は中商二期頃のものか。この窖藏をどう考えるかは今後の洹北商城での調査の中で検討できるまで待ちたい。今回は華北の窖藏を検討するつもりであったが鄭州商城のことだけしかできなかつた。残りの多くは次回以後に譲りたい。(2007年1月18日稿了)

注

- 1 李 艷「南北宝鼎團聚上博」『中国文物報』2004年3月10日
- 2 近藤喬一「華中・華南における青銅器の埋納—弥生時代青銅器との関連で見た—」『季刊明日香風』第22号、1987年4月
- 3 今村啓爾「紀元前1千年紀の東南アジアと中国の関係」『東南アジア考古学』第18号、1988年6月
- 4 近藤喬一「燕下都出土の朝鮮式銅戈」『有光教一先生白寿記念論叢・高麗美術館研究紀要』第5号、2006年11月
- 5 河南省文物考古研究所・鄭州市文物考古研究所『鄭州商代銅器窖藏』科学出版社、1999年
- 6 河南省博物館「鄭州新出土的商代前期大銅鼎」『文物』1975—6及び注5
- 7 林巳奈夫『殷周時代青銅器の研究』—殷周青銅器綜覧一、図版、吉川弘文館、1984年の図版51—6では殷中期の鬲鼎として分類されている。
- 8 注5
- 9 難波純子「初現期の青銅彝器」『史林』72巻2号、1989年3月
- 10 a 唐際根「中商文化研究」『考古学報』1999—4
- 10 b 唐際根・難波純子「中商文化の認識とその意義」『考古学雑誌』84巻4号、1999年3月
- 11 河南省文物研究所・鄭州市博物館「鄭州新發現商代窖藏青銅器」『文物』1983—3及び注5
文献
- 12 林巳奈夫の見解をいれて難波純子も截頭尊とよぶ
- 13 難波純子は岐尾とよぶ
- 14 注9
- 15 注10 b
- 16 注10 b
- 17 注5
- 18 注10 b
- 19 注10 bの注(31)
- 20 河南省文物考古研究所『鄭州商城』—1953年～1985年考古發掘報告—中冊、文物出版社、2001年、図四八六—2
- 21 注10 b
- 22 李京華「鄭州商代大方鼎拼鑄技術試析」『鄭州商代銅器窖藏』科学出版社、1999年附録一
- 23 李京華・郭移洪「鄭州商代窖藏大方鼎拼鑄技術試析」『鄭州商代銅器窖藏』科学出版社、1999年附録二
- 24 林巳奈夫『殷周時代青銅器の研究』—殷周青銅器綜覧一、図版、吉川弘文館、1984年

- 25 中国青銅器全集編輯委員会『中国青銅器全集』第1巻、夏・商（一）、文物出版社、1996年
- 26 江西省文物考古研究所・江西省博物館・新干県博物館『新干商代大墓』文物出版社、1997年
- 27 末房由美子『关于新干大洋洲出土的臥虎大方鼎』『紀念殷墟甲骨文發現一百周年國際學術研討會論文集』社会科学文献出版社、2003年
- 28 陳夢家「殷代銅器」『考古學報』第7冊、1954年、図版40—43
- 29 a 中国社会科学院考古研究所『殷墟婦好墓』文物出版社、1980年、彩版一、図版三
- 29 b 中国社会科学院考古研究所『殷墟青銅器』文物出版社、1985年、図四
- 30 a 梁思永・高去尋『侯家莊』第五本—1004號大墓一、中央研究院歷史語言研究所出版、1970年、図版106—117
- 30 b 李濟・萬家保『殷墟出土青銅鼎形器之研究』古器物研究專刊第四本、中央研究院歷史語言研究所出版、1970年、図版25—31
- 31 中国社会科学院考古研究所安陽隊「殷墟259、260号墓發掘報告」『考古學報』1987—1
- 32 注24の方鼎17
- 33 注24の方鼎71
- 34 注5や注6には61cmとだけあるが、張国碩『青銅方鼎研究』—兼談乳釘紋与玄鳥崇拜之關係—『中原文物』1994—2には口沿辺長67、幅61cmとある。
- 35 陳志達「殷墟出土的文化遺物、鑄銅工藝」『殷墟的發現与研究』科学出版社、1994年、134参照
- 36 注24
- 37 注24では張寨南街窖藏坑の鬲を林巳奈夫は鬲鼎と分類しなおしている。ただ高87cmとあるのは35cmの誤りである。
- 38a 大阪美術倶楽部『中国王朝の粹』2004年6月、図版3
- 38b 中国文物報2006年6月9日には「堪与司母戊鼎比肩的“子龍鼎”」のタイトルで、この鼎が「国家重点珍貴文物征集專項經費」を使って買いもどされたことが報じられた。
- 39 中国社会科学院考古研究所『偃師二里頭』1959年～1978年考古發掘報告、中国大百科全書出版社、1999年、図131—11
- 40 孫華「太陽和鳳凰的頌歌」—写在金沙村太陽神鳥金飾被推荐為中国文化遺產標志之際—『中国文物報』2005年8月10日
- 41 林巳奈夫「中国古代の太陽紋」『中国考古学』第6号、2006年12月
- 42 注29 a の図65
- 43 唐蘭『西周青銅器銘文分代史徵』中華書局、1986年
- 44 注24、方鼎33、方鼎72
- 45 『論語・爲政』に「殷因於夏礼、所損益可知也、周因於殷礼、所損益可知也。」とある。

46 安金槐「關於鄭州商代青銅器窖藏坑性質的探討」『鄭州商城考古新發現与研究』1985—1992、中州古籍出版社、1993年

47 注5の序

48 宋国定・王文華・曾曉敏「商代王室重器在鄭州重見天日」『中国文物報』1996年4月21日

49 陳旭「商代隰都探尋」『鄭州大学学报』哲学社会科学版、1991年第5期

なお方酉生「從三處窖藏坑看鄭州商城為何王都」『考古与文物』1999年3期は、坑の年代を白家庄期とし鄭州商城が仲丁の遷都した隰都で河亶甲が相に都を遷したあとに窖藏坑は形成されたとする。鄭州商城隰都説は安金槐にはじまり楊育彬も受けついでいる。鄭州商城は湯王の亳説は鄒衡の主張するところで、現在の考え方はこちらに傾いている。鄒衡「鄭州商城即湯都亳説」『文物』1978—2

50 『史記・殷本紀』に「自中丁以來、廢適而更立諸弟子、弟子或争相代立、比九世乱、於是諸侯莫朝」とある。

51 陳旭「鄭州商城窖藏大銅方鼎的思考」『2004年安陽殷商文明国際學術研討会論文集』社会科学文献出版社、2004年

52 注5

53 注10 a・10 b

唐際根「商代中期的商文化」—中商文化的分期与年代、中商文化的分布与類型—『中国考古学』夏商卷、中国社会科学出版社、2003年

54 河南省文物考古研究所『鄭州商城』—1953年～1985年考古發掘報告—上冊、文物出版社、2001年、PP. 224～227

しかし注5の序で楊育彬は小双橋遺跡が廢棄された後も鄭州商城が機能していた可能性がでてきたとして、当初、研究者達が考えていた期間よりも鄭州商城の活動期間はもっと長いかもしれないと言っている。

55 張立東「商代早期的商文化」—鄭州商城—『中国考古学』夏商卷、中国社会科学出版社、2003年

56 張光直「商王廟號新考」『中国青銅時代』香港中文大学中国文化研究所中国考古藝術研究中心集刊(二)、中文大学出版社、1982年

57 注51

58 陳夢家『殷墟卜辞綜述』科学出版社、1956年は方国地理の章で盤庚以前の五遷を検討した。

竹書紀年(御覽83引)

尚書序

外丙居亳

湯始居亳

仲丁自亳遷於囂

仲丁遷於囂

『殷本紀』“隰”

河亶甲自囂遷於相

河亶甲居相

祖乙居庇 祖乙圮於耿 『殷本紀』“遷於邢”

南庚自庇遷於奄

盤庚自奄遷於北蒙曰般 盤庚宅般 『殷本紀』“治亳”

として盤庚が般に遷る以前の五遷とは、囂、相、耿、庇、奄であるとする。竹書紀年の記す商王の名號はおおよそト辞と同じであるから、それが記す諸王の遷都の地もまた信ずることができるからという。議論が都の比定地も含めて不確定な部分が多く多岐にわたるので、ここでは基本的に『史記』殷本紀の記述をもとに考えた。

59 注10 a 及び10 b

60 『太平御覽』卷八三、皇王部八の引く『竹書紀年』による

61 河毓靈「商代中期的商文化—中商時期の重要遺跡」『中国考古学』夏商卷、中国社会科学出版社、2003年

62 『史記・殷本紀』では

「中宗崩、子帝中丁立。帝中丁遷于隰。河亶甲居相。祖乙遷于邢。帝中丁崩。弟外壬立、是為帝外壬。…帝外壬崩、弟河亶甲立、是為帝河亶甲。…河亶甲崩、子帝祖乙立。…」とある

63 小南一郎『古代中国—天命と青銅器』京都大学学術出版会、2006年

64 近藤喬一「九鼎と金人」—中国古代王権のシンボル—『アジアの歴史と文化』第十輯、山口大学アジア歴史・文化研究会、2006年3月

65 a 林巳奈夫「殷周時代の凶象記号」『東方学報』京都第39冊、1968年

65 b 林巳奈夫「所謂饗饗紋は何を表はしたものか—同時代資料による論証」『東方学報』京都第56冊、1984年

66 注63

67 注34

68 白川 静『字通』平凡社、1996年

69 注68

70 注63

71 孟憲武「安陽三家庄、董王度村発現的商代青銅器及若干問題的討論」『安陽殷墟考古研究』中州古籍出版社、2003年

挿図出典

挿図 1

河南省文物考古研究所「河南鄭州商城宮殿区夯土牆1998年の発掘」『考古』2000—2

図出典

第1図

- A 河南省文物考古研究所・鄭州市文物考古研究所『鄭州商代銅器窖藏』科学出版社、1999年
- B 中国社会科学院考古研究所『偃師二里頭』中国大百科全書出版社、1999年
- C 1 『中国文物報』2005年8月10日
- C 2 近藤喬一撮影
- D 中国青銅器全集編輯委員会『中国青銅器全集』第1卷夏・商（一）、文物出版社、1996年
- E 江西省文物考古研究所・江西省博物館・新干縣博物館『新干商代大墓』文物出版社、1997年
- F Aに同じ
- G 中国社会科学院考古研究所『殷墟的發現与研究』科学出版社、1994年

第2図・第3図・第4図

第1図Aと同じ

第5図

- A 中国社会科学院考古研究所『殷墟婦好墓』文物出版社、1980年
- B 陳夢家「殷代銅器」『考古學報』第7冊、1954年
- C 梁思永・高去尋『侯家莊』第五本、1004號大墓、中央研究院歷史語言研究所出版、1970年
- D Cに同じ

表出典

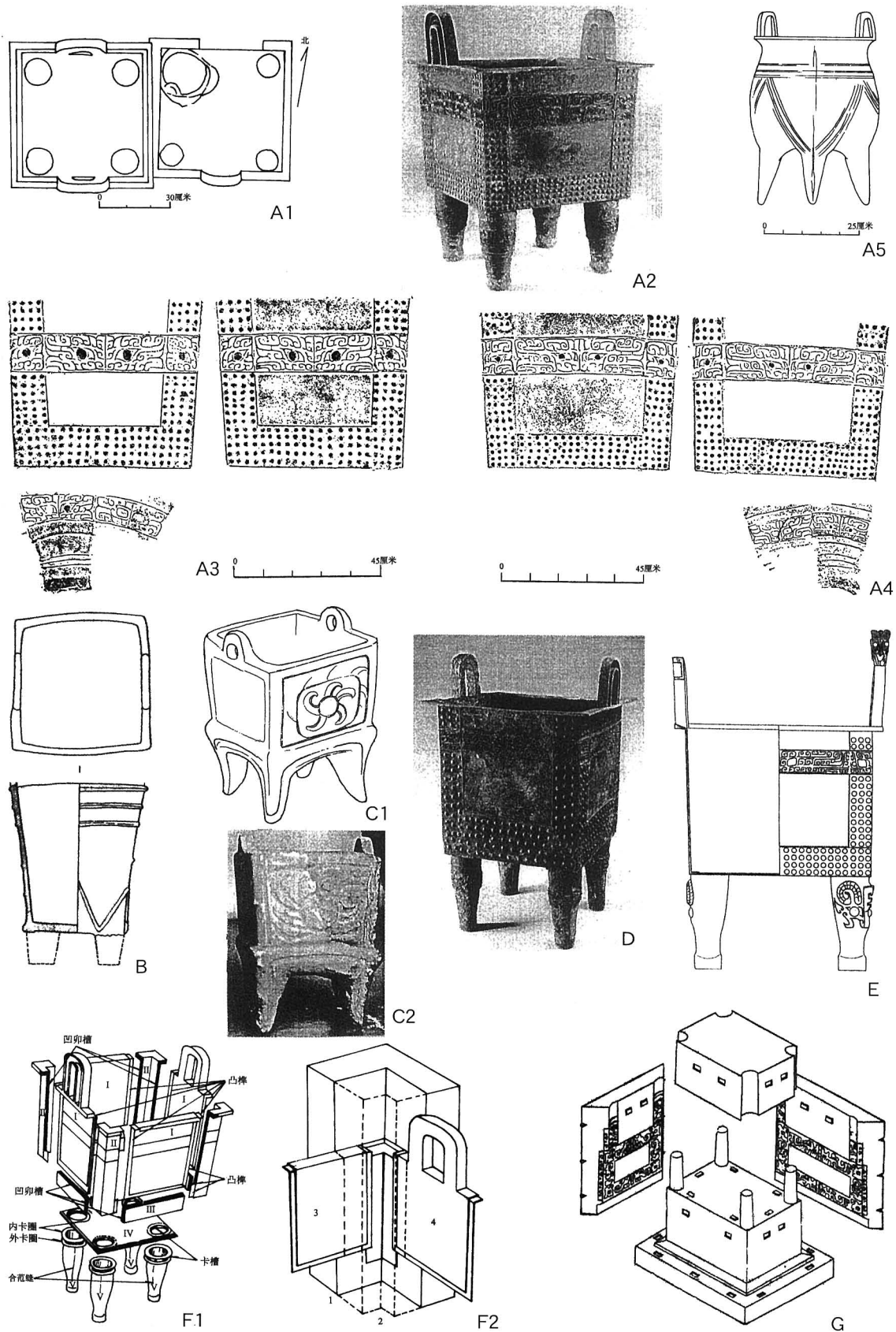
第1表

- 河南省文物考古研究所ほか『鄭州商代銅器窖藏』科学出版社、1999年
- 中国青銅器全集編輯委員会『中国青銅器全集』第1卷夏・商（一）、文物出版社、1996年
- 江西省文物考古研究所ほか『新干商代大墓』文物出版社、1997年
- 中国社会科学院考古研究所『殷墟婦好墓』文物出版社、1980年
- 梁思永・高去尋『侯家莊』第五本、1004號大墓、中央研究院歷史語言研究所出版、1970年
- 陳夢家「殷代銅器」『考古學報』第7冊、1954年
- 林巳奈夫『殷周時代青銅器の研究』図版、吉川弘文館、1984年
- 張国碩「青銅方鼎研究」『中原文物』1994—2
- 喀左縣文化館ほか北洞文物發掘小組「遼寧喀左縣北洞村出土的殷周青銅器」『考古』1974—6
- 范汝森「太保鼎」—天津市藝術博物館藏—『文物』1959—11

第2表・第3表・第4表

張光直『中国青銅時代』中文大学出版社、1982年

陳夢家『殷墟卜辭綜述』科学出版社、1956年



第1図 張寨南街方鼎と関連史料

A 1～A 5 張寨南街窖藏銅器

C 二里頭陶鼎

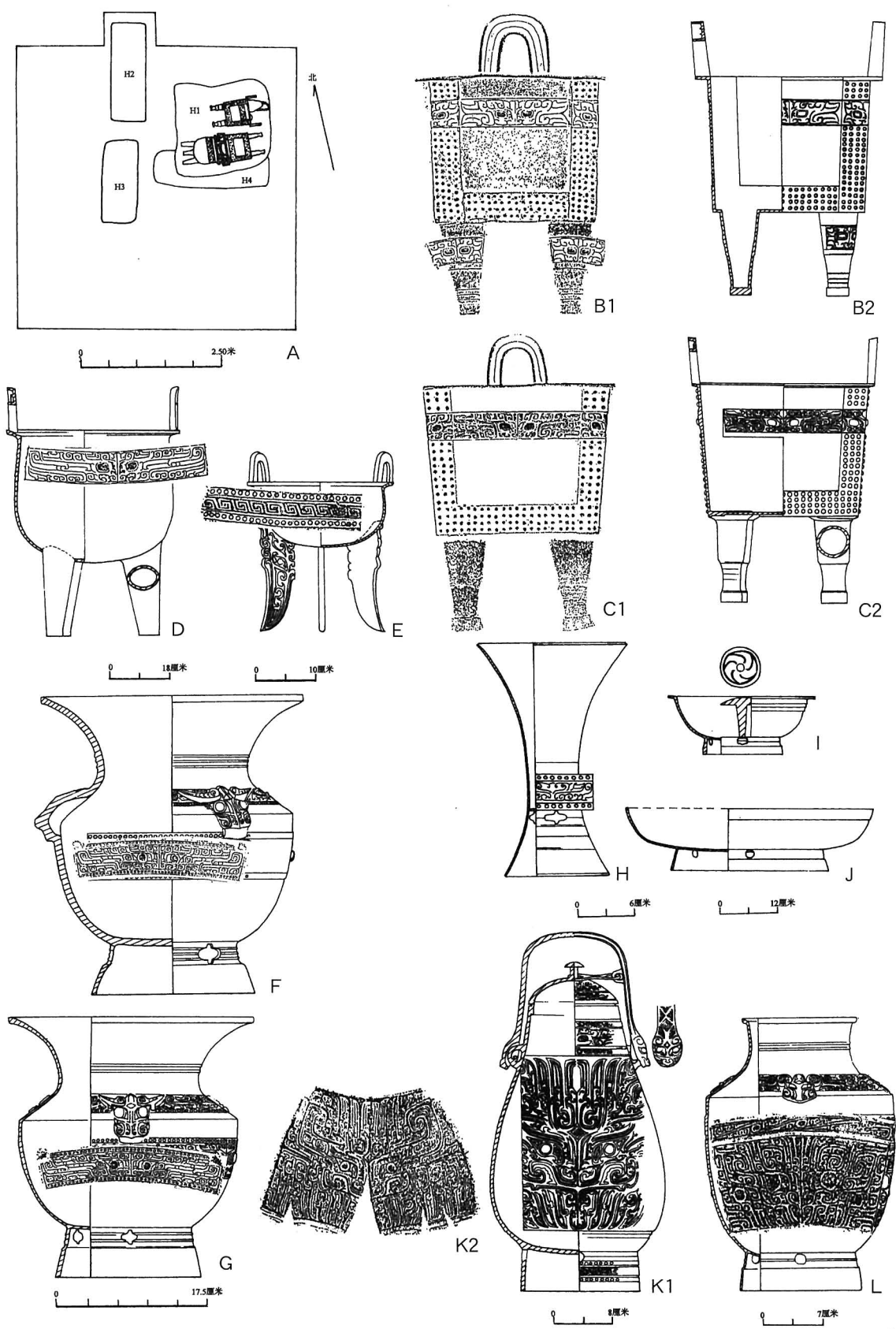
E 江西新干銅方鼎

G 司母戊鼎鑄造法

B 二里頭陶鼎

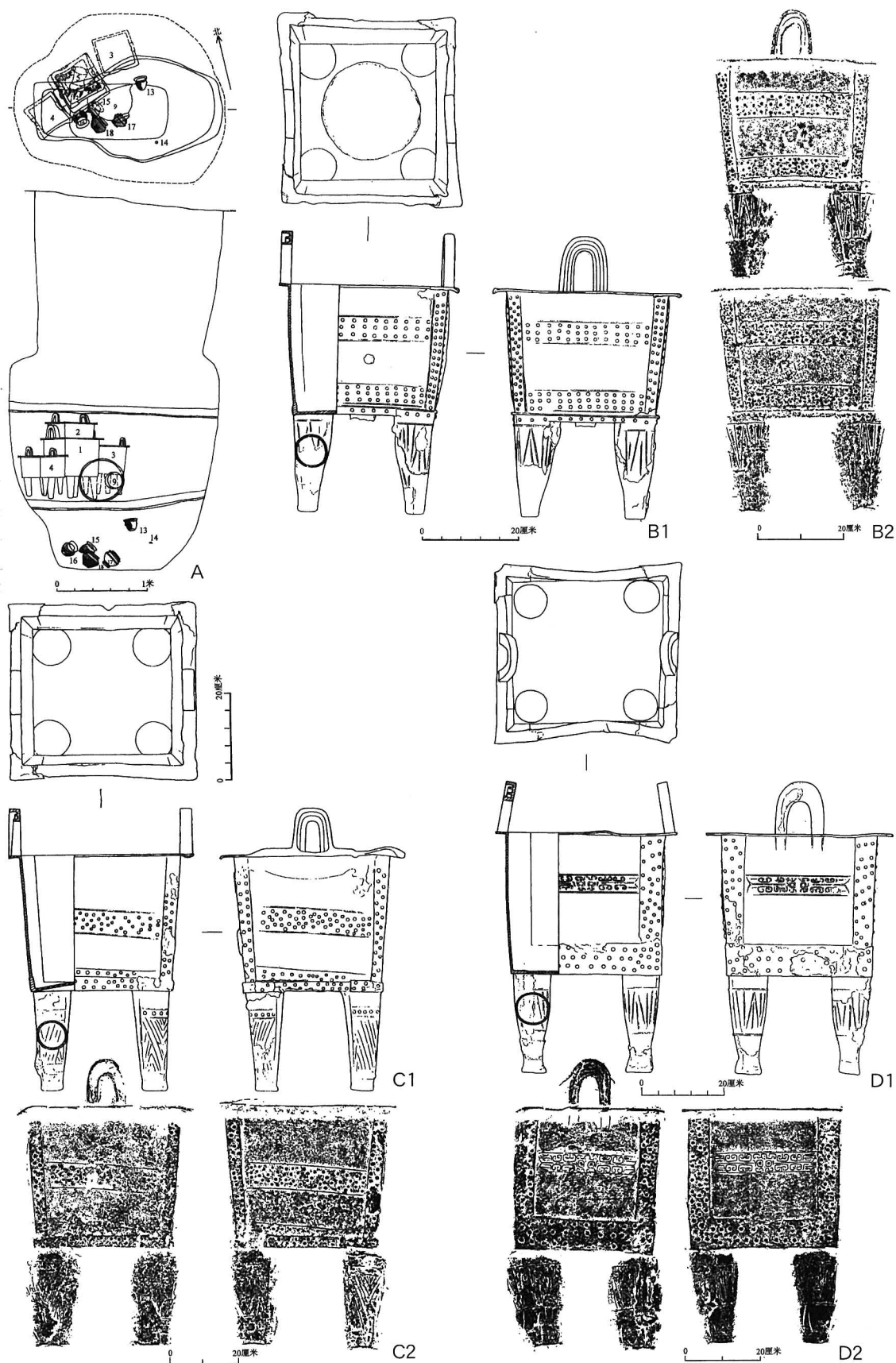
D 山西平陸前庄銅方鼎

F 拼鑄法



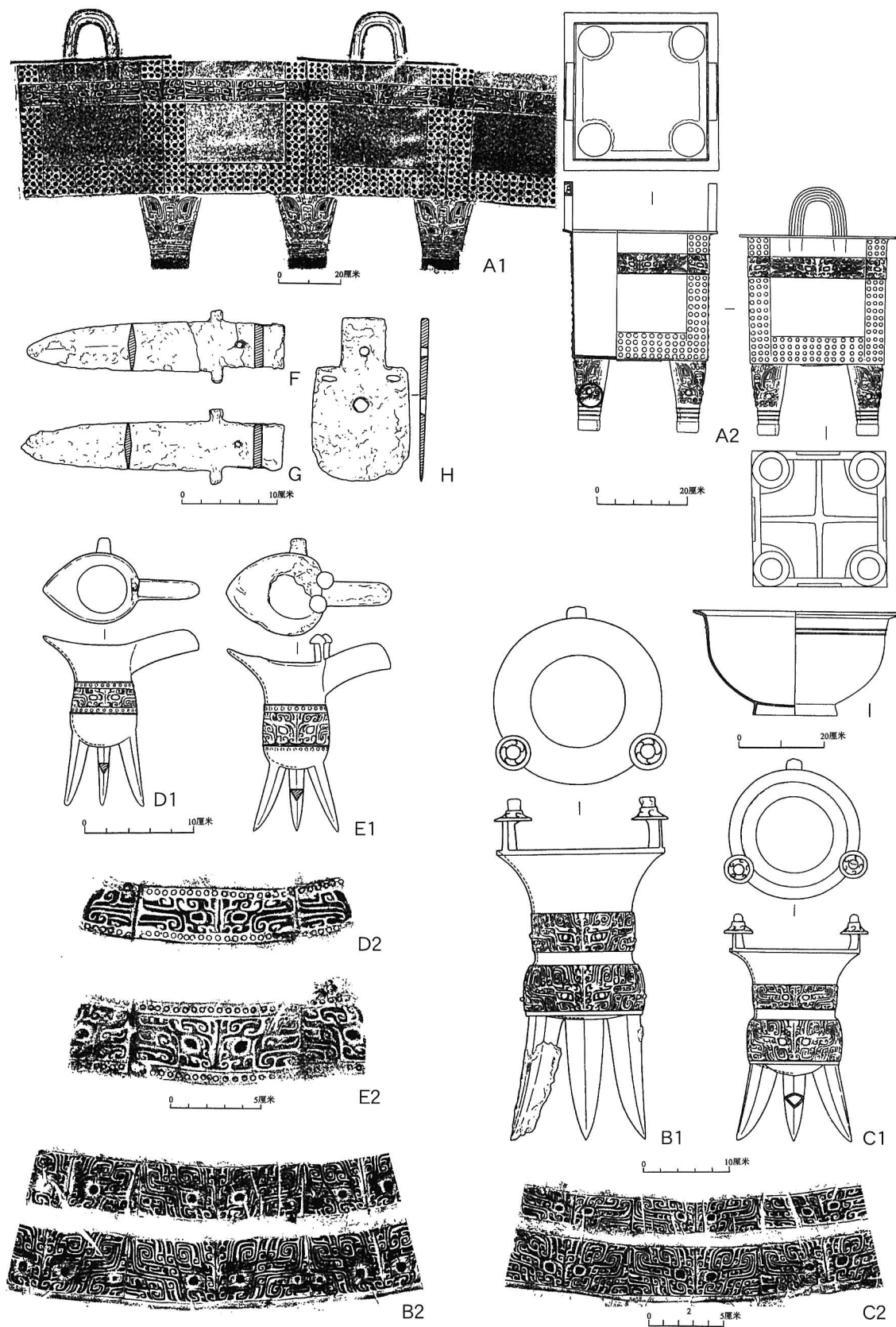
第2圖 向陽回族食品廠窖藏銅器

- | | | | |
|-------|-------------|-------------|-----------|
| A 窖藏坑 | B 方鼎H 1 : 8 | C 方鼎H 1 : 2 | D 圓鼎 |
| E 扁足鼎 | F 尊 | G 尊 | H 觚 |
| I 中柱盂 | J 盤 | K 提梁卣 | L 罍 (截頭尊) |



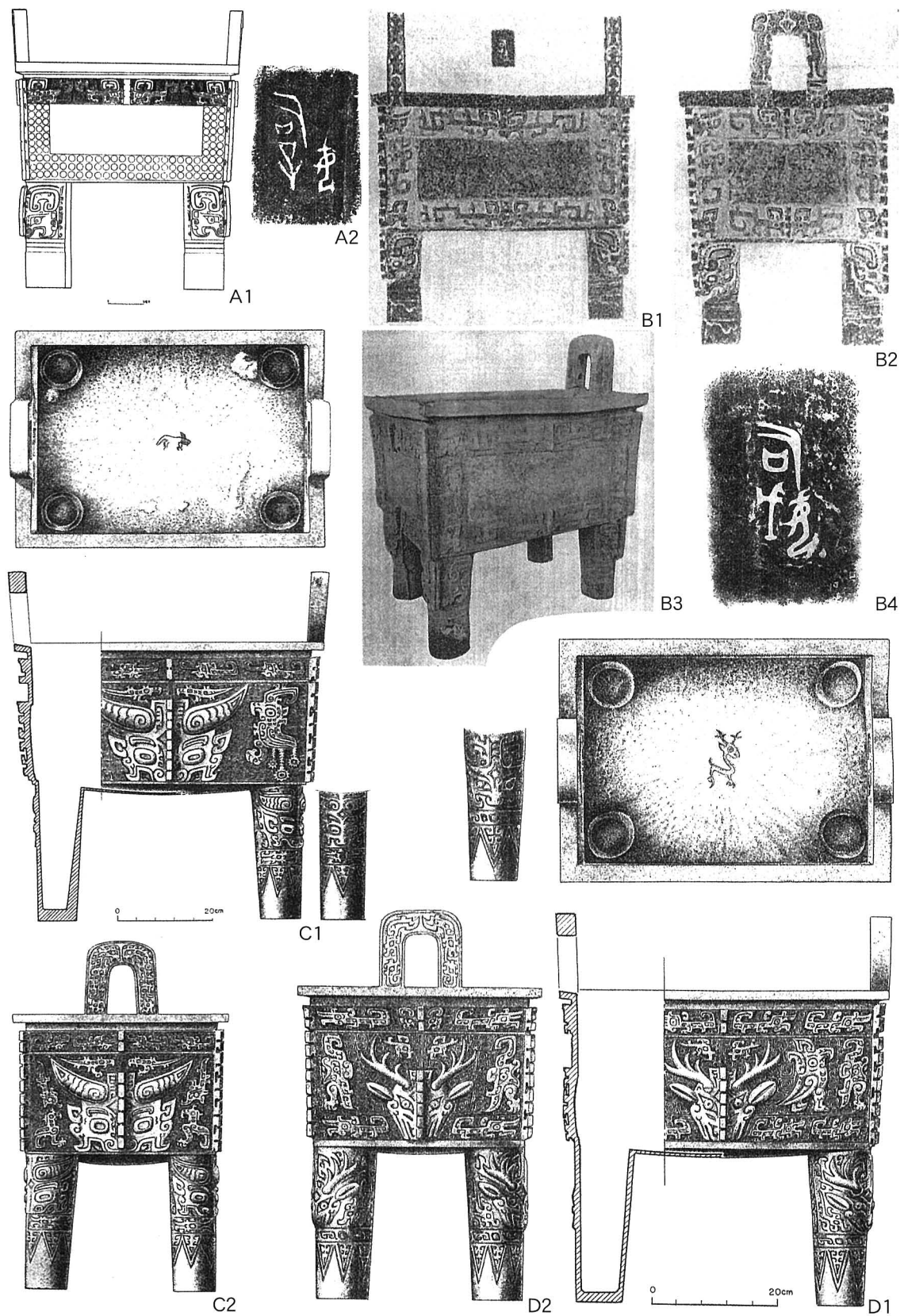
第3图 南顺城街窖藏铜器(1)

A 窖藏坑 B 方鼎H1上: 4
 C 方鼎H1上: 3 D 方鼎H1上: 2



第4图 南顺城街窖藏铜器(2)

A 方鼎H1上:1 B 斝 C 斝 D 爵 E 爵
 F 戈 G 戈 H 鉞 I 盂



第5図 殷墟期の方鼎

A 司母辛方鼎

B 司母戊方鼎

C 牛鼎

D 鹿鼎